研究

魅せられて綴る藩文学（九）
藩学「四教堂」と光哲

勝間田　三千夫
（会員　佐伯市中村北町二―九）

（二）咸宜園五子の詩

淡窓は二十四歳のとき筑前亀井塾三年の学業を終え、帰郷して長福寺学寮に塾を開業し、文化四年六月二十六歳のとき豆田町に塾舎「桂林荘」を建て、文化十四年七月三十六歳に至って堀田町に塾舎を移転して「咸宜園」を開業した。

しかしこの十一年の歳月は、淡窓にとって管理上失策であったことを認めている。

「始メテ桂林園ヲ開キシヨリ今春迄凡十一年ナリ、其間疾病事故アルニアラザレバ一日トシテ行カザルコトナシ、今一朝ニシテ之ヲ毀ツコト惆悵（ちゅうちょう）ノ至リナリ」

と感慨を深くしている。不満と嘆きの十一年間は塾経営上に困難をきたしたことは疑えないし、又この反省が後の咸宜園経営に生かされたことも疑う余地はない。

「此年秋冬ノ頃。予五子ノ詩ヲ作ル。詩ニ曰ク。」

といっているように、淡窓三十六歳は門生中秀才の者五子を撰して「咸宜園五子の詩」と題して詩を作った。五子とは、小關亨（加峯亨）・館林伊織（麻生伊織）・相良茂（児玉茂）・合谷儀策（劉君鳳）・中島益多（中島子玉）のことである。

十一年間に思う桂林園時代、淡窓のいる所必ず五子がいた。桂林園経営に左右の手となって助力を惜しまなかった門生である。二月二十八日新舎が落成し、咸宜園と改名して心機一変新たな出発を前に五子と共に誓って、今九月にして隆盛を極めるに至ったのである。

淡窓の教育哲学とも言うべき中心思想「敬天」こそ人間形成の根本理念であり、その徹底した教育が施された中に俊才五子が撰ばれたのである。

塾経営の節目として桂林園の思い出に作ったのがこの五子の詩であり、愛弟子五子の名を題目にして、夫々特長を挙げて他との長所の比較をなし、激励しまた個性の発揮につとめられている。

長卿博洽才　長卿は博洽の才あり。
善作三唐語　善く三唐の語を作す。
幽燕沈雄姿　幽燕沈雄の姿。
可以任旗皷　以て旗皷に任ず可し。
身棲橘柚林　身は橘柚の林に棲み。
名播菁華圃　名を菁華圃に播く。

長卿は小關亨、後の可峯蟠梁、医師と成る、時三十歳。長卿は才ひろく、唐代の語を以て能く詩を綴り、容姿沈雄、能く人に長たるを得た。柚木村に住す、且つ医者であって儒者の仲間に其の名を傳う。三唐とは初唐、盛唐、中唐、菁華とは、旧唐書に「論語者六經之菁華也」とあり。

彦國耽佳句　彦國は佳句に耽けり。
冥搜要驚人　冥搜、人を驚かすを要す。
龍門波底珠　龍門波底の珠。
奪為席上珍　奪って席上の珍となす。
寄語謝關子　語に寄せて關子に謝す。
莫誇髯絶倫　誇る莫れ髯絶倫。

彦國は館林伊織、後の麻生伊織、医家、時二十六歳。彦國は佳句を求ることに浮身をやすし、暗い所まで入ってさがしまわし、人をあっと言わせようとする。龍門の波の底に珠をさぐる程の態度で佳句を書物の中から求め出して、詩会の席の人前で「どうだ、めづらしかろう」と言わす。それは兎に角、敢えて君に言うが、髯のことだけは小關にかなわないから頭を下げるがよいぞ。

龍門は黄河の中流にあり、登龍門の語及び俗説の鯉の瀧登りは之から出ず。伊織の住居近くに龍門の瀧あり。三段に分れ頗る黄河の龍門に似たりという。

九畹跡雖舊　九畹の跡、舊なりと雖ども。
芳蘭有新芽　芳蘭、新芽あり。
玉郎俊秀人　玉郎、俊秀の人。
咳唾粲成花　咳唾、粲として花を成す。
白圭枉三復　白圭、三復を枉げ。
妙語本無瑕　妙語、本より瑕無し。

玉郎は兒玉茂、号有台当時二十三歳、医家、兒玉の玉

をとって玉郎といっている。これが祖仲美は蘭畹と号す。九畹に蘭の生ずることは昔から知られているが、今かんばしい蘭が旧い九畹の家に新しい芽を吹いた。有台は俊秀で、吐き出す唾が悉くさん然たる花となるくらいだ。白圭という如き明玉を再び三再びしきりにひねくって見ても、もときずが無いのだもの、どうして其のきずを見つけられようか、有台の妙語句もまた、白圭と同じくきずがない。

詩家稱別才　詩家、別才を稱す。
我見平川子　我は見る、平川子。
禦寇御風行　禦寇、風を御して行く。
飄飄不可企　飄々として企つ可からず。
此君有鳳毛　此君鳳毛有り。
圓也何曾死　圓也、何ぞ曾つて死せん。

平川子は劉石舟のこと、玖珠郡平川の出身、時二十一歳、儒者。列御寇は列子、圓は劉石舟の兄で才名あったが早世。

詩家に別才ありというが、君こそその人である。列御寇は風に御して行く、と荘子には言っているが、まことに君の詩は飄々と風にのって行くようで、どこへ行くのやら普通の人はわからぬようだ。此人は風采も才学も秀絶で兄の圓死せりと雖も後ありという可きである。

偉哉南溟鳥　偉なる南溟の鳥。
養翼息池塘　翼を養うて池塘に息む。
人材觀晩節　人材は晩節に観る。
誰得抗中郎　誰か中郎に抗するを得ん。
神駒或齧踶　神駒或は齧踶。
鞭策在王良　鞭策は王良に在り。

中郎は中島子玉、時十七歳、王良は孟子藤文公章句下に「昔趙簡子王良をして云々」とあり、趙簡子は晋の太夫、王良は馬をよく御せし人。

あゝえらいもんだ。（南溟というは子玉が佐伯の生まれであるからいった）南の大きな海のかなたに住むという大きい鳥、今は池の堤にやすんで翼の成長するを待っているが、後年に至りこの人材が大成したならば、誰もこの中郎に対抗し得るものは無かろう。

千里をかける駿馬ともいうべく之をむちうち馴練する王良の如き名手が欲しいものだ。

淡窓は「三十年前之妙選。爾後豈無継之者。」といっている。

十二月　十五日　井上彌六郎自秋月至。

夜半有事。復歸秋月。

二十日　改來歳月旦。益多加六級下。

茂除名。

來る歳の月旦評を改め、益多六級下に昇進した。此日、先輩の兒玉茂（五子の一人）と惜別しなければならなかった。淡窓は「茂以乙丑歳入門。到是十有三年。席至加六級上。初予制席序。到此亦十三年。録名者。盖三百人。其至此等者。諌山安民。小關亨。麻生伊織。僧大龍。及茂五人耳。今将併益多而六矣。茂數年來學醫。不用力於學。獨留其名以冠衆耳。生才思俊秀。而其為人謹厳。言行不苟。予大有期於他日云。」といっている。

児玉茂は文化二年に入門し、是に到って十有三年。この十三年に名を録する者盖三百人、席序制して六級上に録する者はこの五人耳、今将に益多あわせて六とす。茂数年来医を学び、力を学に用いず独りその名を留め、以て衆耳に冠す。生まれつき才知をもった人で、「而慎み深く、言行苟しからず。」淡窓は大に他日を期待した。門生も同じく他日を期待し、茂の大歸を見送った。師走の堀田村は連日徴雪の舞う寒い日であった。

二十二日　是日為益多改竇豪作墓碑。

この日益多、豪作の墓碑を改め、二十八日に到って古田子由の墓碑を建てた。

文化十四年も歳の暮を迎えた。益多二回目の暮であり、塾生四人（益多、其順、屯、亮傳）で歳を守った。

文化十五年正月元旦淡窓は詩を賦し、筆を試して天保篇を読す。

正　月　二日　開講。講大學。聴者。益多。潤二。松吉郎。其順。海藏。金八。屯。亮傳。上塚。觀古田子由（故豪作）墓碑。

淡窓の大学講を聴いて後古田子由の墓前に上り、遂に

魚町に赴き、新年の詩会に出席した。

四日　起國語講。聴者。益多。潤二。松吉郎。謙吉。其順。頼之。海藏。金八。圓重。屯。大巖。普該。亮傳。使益多起史記講。

淡窓国語講を起し、益多史記講を起す。

(三) 益多小帰

文化十五年

正　月　人日　發與中嶋幹右衛門。明石仙次。松下左助。古田恵十郎書。夜招益多供曉飯及酒。

陰暦正月七日（この日気候のぐあいによって、その年の一般人事を占うので人日という。）佐伯から益多宛の書がとゞいた。伯父宗馬からの手紙で、書面は明らかではないが、帰藩するようにとの書であったろう。表書は入門時に益多を伴って淡窓塾に赴いた時、父幹右衛門と紹介者明石仙次ほか、保証人とも言うべき松下左助（筑陰長子）、古田恵十郎（故豪作の兄、豪作入門時は父七左衛門であった）の連書の時と同じく、この度益多帰藩に先立ち謹書としたものである。淡窓は国命とあればと、夜に入って益多を招きその帰郷惜別の酒飯をふるまった。

八日　為益多作字十餘紙。

十日　益多帰郷。亮三郎随往。同諸子出送。予到坡上先帰。

益多佐伯に帰省するにより相良亮三郎が従行した。送別に淡窓も門生等と共に見送り、堤に至って別れた。益多は文化十三年三月四日に入門し、此に至って二年に満たず、然るに学業昇進、誠に目を驚かすに堪えたり、また去年来都講となり、塾政を監理して宜しきを得たり。人を教えしより以来、人材此人を以て第一とす。其帰るに及んで、殆ど左右の手を失うが如し。と、淡窓は益多の再遊あることを期待せずにはいられなかった。都講は塾生職掌の最上位で、塾中一切の事を総裁する重責であり、月旦評による席序に拘らず、上級生の中から以て之に充てると塾則にあるように、益多十七歳は去年六月一日上級生（五級下）となっての抜擢であった。

二月も半ばになれば、堀田町にも連翹花、花木花が咲

き乱れ、初春の香りを漂わせていた。

三月三日桃の節句、魚町に青梅花も盛り、秋風菴の庭園前の両桃、門外の櫻花も盛り、樓上に小酌をくみかわすとき、ふと益多が頭の中をよぎるのである。

桃樹一本、また秋風菴垣中にある櫻も今や満開、九日も夜に入って相良亮三郎が佐伯から帰省した。益多に従行して二ヶ月、待ちかねていた淡窓に吉報を持ち帰ったのである。淡窓は是日の事を、「得益多父子書。」と、書文は、君命を持って藩校の事を仰せつかった為暫く止まる、六月には再遊したい、というのであった。翌十日淡窓は益多父子に答えて書を発した。書中は益多に稿及輞川圖詩（輞川とは陝西省藍田県にある地名、唐代の詩人王維の別荘地という）の包であった。再遊するまで故郷にあっても学問を続ける益多の求めか、はたまた淡窓の愛情濃やかな表現であったかもしれない。

（四）益多再遊

文化十五年も四月二十二日をもって文政元年と改元された。

文政元年（一八一八）

六　月　六日　益多。基順入塾。

中島益多藩命により帰郷して六月ぶり、去る三月九日相良亮三郎に託し、六月に再遊せんと約束した通り是日入塾した。

淡窓はしかしその実を次のように日記している。「益多有六月再遊之約。而其實不可必也。」と三月九日以来三月近くも待望していたものの、覚束がなかっただけに不図（はからず）も来たった喜びを押さえきれなかったのである。

益多は入塾するや再び塾政を執り、変らぬ塾生活に入った。

九日　會艸堂。尋館林清記宅之會也。會者。益多。佐野宏。兒玉茂。釋玄海。惠禪。館林清記。而熊谷昇後至。夜二更初散。

十日　癈禮記講。始使益多代講文選。

十二日　病如昨。夜使益多代講毛詩。

淡窓の病昨日に変らず、夜講、益多代って毛詩を講ず。

十七日　諸子會熊谷昇宅。尋九日艸堂之會也。

七　月　九日　是日為古田子由大祥忌辰。持齊半日。午後諸子來會。尋前熊谷昇宅之會也。會者。玄海。益多。惠禪。館林清記。兒玉茂。入夜而散。

豪作、文化十三年七月九日より是日が三回目の命日にあたり午前中持斎した。

十日　使益多館諫山元静。以衛守疾不愈。

咸宜園の衛守疾い愈らず、益多医師諫山元静を呼びに行く。

十四日　放學。上塚。遂到魚街。謁先祖。

二十五日　午時同益多赴信曉家會。因訪此君亭。謁法蘭師墓。既而會逍遙園。會者。兒玉茂。釋圓什。法珍。玄海。惠禪。熊谷昇。館林清記。蒲池久市。申牌三松齊壽携頼之至。夜二更後散。

八　月　九日　午時携益多。之釋惠禪家。尋逍遙園會也。會者。釋慈觀。玄海。兒玉茂。館林清記。入夜蒲池久市至。酉牌而歸。是日。始編詩社人名録。記名者七人。

十五日　放學。

十八日　加峰亨過訪。小飲樓上。益多亦陪。夜留塾。

二十八日　中津醫官辛島正菴來訪。

二十九日　携益多訪辛島正菴。遂詣城内。過中城而歸。

九　月　九日　放學。

二十四日　會艸堂。尋十三日三松齊壽宅之會也。會者。小林安石。益多。蒲池久市。兒玉茂。館林清記。初更後散。

二十六日　改月旦評。益多加六級上。去る歳の暮六級下に昇級し、いま六級上に進んだ。名実共に上位六指に比肩し、最上位を目指して第一線をなした。

二十八日　宇三郎來訪。使益多到廣圓寺見□□伸謝。

十　月　二日　使益多開文章軌範講。
十日　使益多往有謙館謝。

この日臼杵海士野有謙来見、門人新名珉章入門の為益多代って応対する。

十一日　招海士野有謙。以酒食饗。玄壽。珉章。亦與焉。益多陪席。
二十三日　開爐。始黄山谷詩鈔輪講。
二十四日　會艸堂。尋九日觀音閣會也。會者。益多。兒玉茂。三松齊壽耳夜初更後散。
二十八日　鹽屋平右衛門來訪。供午飯。發與空石先生書。始與益多講蘇詩。

第二節　咸宜園の高弟

（一）頼子成の来訪

社会は学校である、旅行は活学問である、人は旅行によって最も多くの興味を感じ、最も多く自己に価値を加えるものである、と好んで遊歴した。文をひっさげ西遊（九州）に友を会さんと、文政元年（一八一八）三月五日門人後藤松陰を伴って広島を出発した。舟で豊前大里（門司）に渡り、四月二十六日博多に亀井昭陽（四十六歳）を訪ねた。昭陽とは文化三年以来十三年目の会見をした。五月二十日佐賀に親友古賀穀堂、草場佩川、藩学弘道館の諸儒と会飲して一夜を明かし、二十二日大村を経て舟で長与につき、二十三日長崎に至った。長崎に三月滞在、彼の地は支那文化輸入の地であり、支那文献の淵藪であって、当時の儒者は競って長崎に遊んで見聞をひろめた。山陽の九州遊歴の一つには、此の淵藪を捜らんが為であったと思われる。

八月二十三日長崎を出発して二十五日に熊本へ、二十九日熊本から松橋へ向い発船して九月一日早天、天草島に寄泊佐敷に入る（「天草洋の詩」を作る）。これより薩肥の国境を越え、九月九日（重陽）鹿児島に着いた。一月の滞在で薩摩に見聞を広める（「前兵児謡」「後兵児謡」の詩を成す）。九月三十日早朝鹿児島を発って、十月一日には大隈より加治木大口を経て水俣八代へ、これより豊後に入った。二重嶺を過ぎ九重嶺を越えて、十月二十三日夜豊後岡に着き親友の田能村竹田と再会した。

（※以下次号へ）